

# ARTICLE

## 余暇とレクリエーションからの社会教育——総括と展望 〈第3回〉余暇と遊びから考える 未来の社会教育

「ホール・オブ・フェイム賞」受賞者 園田 碩哉

### 1. 「社会」と「社交」

早くも21世紀の第1クォーターを終わろうとしている現在、世の中の見通しはまことに芳しくない。ウクライナの防戦は泥沼化し、イスラエルの戦争は残虐の度を増すばかりだ。我が国においても天候の異常、相次ぐ災害、それを横目に政治のずさんさは目を覆うばかり、唯一の希望は大谷翔平君の活躍ぐらいという体たらく。こうした時代の危機を乗り越えるために社会教育に対しても何ほどかの貢献が求められていることは言うまでもない。

社会教育が学校教育の代替物ともいえる「講座」中心主義を抜け出し、地域社会のあり方そのものを自らの課題にして「人と人のつながり」を活性化する役割を引き受けるべきだという指摘がさまざま

まな論者から提起されている。本誌でも2023年1月号の鼎談で吉田博彦氏が

「社会をどうするかを議論することが社会教育の仕事であり、社会教育はそのためにある」と述べている。氏はまた「人と人との関係性をつくるということが社会にとって大事であり、人が幸せに生きる社会とは絆を大切にする社会だ」という趣旨を述べておられる。社会そのものを見つめ、人と人のつながりが社会を作っていくそのプロセス自体を問題化して議論し合うことが社会教育の本来の姿だということであろう。

ここで一つ指摘しておきたいことは、わが国における「社会」という言葉の受け止め方である。多くの人々がこの語から受ける感じは、必ずしも身近な、慣れ親しんだものではない。「地域社会」に



〈プロフィール〉  
園田 碩哉  
(そのだ せきや)  
1943年横浜生まれ。  
(公財)日本レク

リエーション協会で30年間、レクリエーション運動の推進に努め、1996年実践女子短大教授。その後は、東京都町田市で社会教育委員、生涯学習審議会会長などを務め、現在も地域のNPO法人で活動している。専門は余暇論・遊戯論。  
※本誌 社会教育アワード2022 「ホール・オブ・フェイム賞」受賞

してもそうだが、「上流社会」、「国際社会」、あるいは「社会生活」「社会参加」「社会主義」というように、「社会」は抽象度の高い、日常会話にはあんまり出こないような、よそ行きの言葉である。そして何よりも原語の social が持っている「他者とのつきあい」という身近な意味が忘れられている。social という英語のルーツは socius というラテン語だが、この語の意味は companion Ⅱ 仲間ということである。英語のニュアンスにある「仲間」という一面は、日本語では「社交」という別の言葉に訳し分けられてしまったが、もともと「社会」と「社交」とは同じ一つの観念なのである。だが、パーティの交流に欠かせない踊りである social dance は、日本では「社会ダンス」でなくて「社交ダンス」と言わねばなら



## 特別企画：社会教育アワード受賞者による寄稿

ない。カタカナ語で表す場合も「ソーシャル」ではなく「ソシアル」ダンスとご丁寧にも書き分けている。「社会教育」もこの伝で言えば「社交教育」と言ってもよいわけで、さらにくだけた「つきあい教育」とでもした方が、社会教育の今日的な課題がより鮮明になるのではないかと思う。

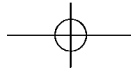
明治の初期に西欧の用語が数多日本語に翻訳されたとき、socialやsocietyに「世間」という語を当てようという案もあった。「世間」は誰にもなじみのある言葉だし、世の中全体を意味するだけでなく、もっと身近なつきあいをも含意している。しかし、西欧の社会がルソーの「社会契約Contract Social」論を経て、主権者たる個人が契約によって社会を作り上げるといふ思想を確立していたのに比べて、われわれの「世間」は契約以前に既に存在していて、個人の意見でそれをどうこうすることは出来ない。個人から世間へのチャンネルは通じておらず、「世間様には逆らえない」のである。そこでsocialには「社会」という新語を作って当てるしかなかったが、日本においても近代化が進むことによって「世間」の変革が進み、社会契約の思想のもとに民主

的な社会が作られるはずだった。実際、「大正デモクラシー」までは、個人がみんなで議論して新しい社会を作るといふ風潮が高まったかに見えたのだが、その後、台頭したファシズムに押しつぶされ、軍国主義が破綻した第2次大戦後、やつと民主主義が根を下ろしたというわけである。とはいえ、その後4分の3世紀の時が流れたものの、社会と社交との一体化は、必ずしも進んでいない。前回指摘した「世界一寂しい」日本の地域社会、市民の3割しか投票に行かない地域政治への無関心という現実を見ると、この国には依然として近代以前の「世間」が幅を利かせているように思われる。われわれの社会教育は、そこにこそ課題を設定して社会⇨社交教育の深化と拡大を目指すかねばならない。そして、そのために欠かせないのが「遊びとレクリエーション」の活性化なのである。

### 2. 遊びとレクリエーションが地域を作る

人と人の関係性はどこからどのように生まれるだろうか。「関係」という用語の一番ポピュラーな使い方は何と云っても「男女関係」であろう。人は愛情によって結ばれ、その結果「家族」という集

団が誕生する。しかし、愛情だけでは世の中は回って行かない。生活するためには働かねばならない。労働を土台にして生産と消費が展開され、さまざまな関係性が張り巡らされて社会が運営される。関係は愛情によっても、また現実的な利害によっても作られていくが、その両者に共通する関係づくりの触媒として「遊び」が重要な役割を果たしている。気の合う男女が相互の愛情を養うためには「デート」と言われる余暇と遊びの共有が欠かせない。企業間の取引や職場のメンバーの相互理解を円滑に進めるにも、得意先の接待や同業者のパーティやゴルフのコンペや職場旅行が繰り返し行われてきた。遊ばなければ友だちはできない——このことの意味を軽視すべきではない。関係性の構築に遊びやレクリエーションが必須の要請であり、地域社会の絆づくりについても、遊びの集合体である「祭り」が枢要な位置を占めてきたことを改めて思い起こす必要がある。現状では多くの祭りが単なる観光資源になって、人集めの見世物に墮しているが、祭りの本来のあり方はその土地に生きる人々の関係性の構築・確認であったことは民俗学の教えるところである。現在の



社会教育の課題は、地域の新たな祭りを地域に住む人たちの力で作り上げることである。それを可能にするのが遊びないレクリエーションの潜在力である。

ここで「レクリエーション」というのは、現在、あれこれの講習会や福祉施設の集会などで行われている「アイスブレイク」や「お楽しみ会」のような矮小化されたレクリエーションではない。それらも包含する、もっと大きな、総合的なプログラムであり、その原義が示すように、人々の活力を引き出し、人と人との関わりを「再創造」するような営みを意味している。具体的には詩と歌と音楽とアート、さまざまな身体活動を含む、「生きるよるこび活動」の総称と言ってもよいだろう。学校のカリキュラムで言う「音楽」「図工」「体育」（それに「国語」の一部も含む）ということになる。学校ではこれらの科目は「国語」「算数」「社会」「理科」の主要4科目に対して「つけたし」のように捉えられてきたきらいがあるが、前者の4科目が基本的には「善き働ぎ人」になるための手段的な科目であるのに対して、「歌うこと」「描く・作ること」「身体を自由に動かすこと」という、それ自体が目的であ

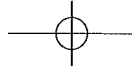
るような人間育成の科目なのである。生涯教育・学習という視点から見ればこれらが人生を意味あらしめる主要科目と言ってもいいくらいである。

本来、「音楽」「図工」「体育」は地域共同体の営みの中に根付いていたものである。どの地方に行っても、その土地に固有の歌があり踊りがあり、また土地の条件を生かした織物や工芸品が作られ、伝承されてきた。さまざまな身体活動も各地で固有なものが生み出され、祭りするときにはそれらが大きく組織されて、あるいは巨大な綱を引き合ったり、速さ比べや力比べ、大集団で玉の取りあいをしたり、あるいは巨木にまたがって斜面を滑り降りるような壮大な「競技」が楽しまれてきた。明治以来の学校教育は、そうした地域の「社会教育」を学校に取り込み、伝統を否定して西欧仕込みの文化・身体活動に置き換えようとした。例えば「唱歌」については慣れ親しんでいた日本音階に替えて西洋音階を持ち込み、西欧風の情緒の歌や西欧楽器を使った音楽教育を強行した。体育についても西欧風の体操や行進を行い、野球をはじめとする近代スポーツを取り入れた身体づくりを推進した。それから150年、

確かにスポーツのように、日本人の日常に溶け込んだものもあるが、「学校唱歌校門を出でず」と言われた音楽生活は、いまだにどこか中途半端な状況にある。何よりもそうした諸文化が地域から切り離されてしまったという点で大きな禍根を残したと言わざるを得ない。日本の地域社会の元気のなさやよそよそしさの依

つて来たるところは、地域社会が本来もっているべき遊びのエネルギーを枯渇させてしまったことにあるのではないかと筆者は考えている。

これからの社会教育は、地域の「音楽」「図工」「体育」レクリエーションのルネッサンスを大きな目標として掲げるべきではないか。それらは本来地域にあったものであり、それを元に戻してもらおうということにすぎない。それは決して困難なことではない。本誌で吉田和夫氏が「ラーニング・コミュニティを創ろう」という連載の中で主張しておられる「学校3部制」を生かせばよい。「音楽」「図工」「体育」は学校の管轄から外して、社会教育に位置づけ、現に行われている「放課後教室」を充実させ、地域の中の音楽・アート・スポーツ活動と接続すればいいのである。その手始めとして、ク



## 特別企画：社会教育アワード受賞者による寄稿

ラブ活動を地域社会に委任することが求められている。現在の地域にはそれを受け止められる潜在力があると思う。子どもたちとともに地域の文化を育てることこそ、社会Ⅱ社交Ⅱあそびの等式を成立させる生きた社会教育実践となるはずである。

### 3. 教育資源としての余暇

教育を成立させる基本的な資源は「余暇」に他ならない。学校教育が成立するのは、子どもたちが労働に追い立てられることのない余暇を保証されているからである。スクールという語がギリシャ語のスコレー（余暇）に由来することはよく知られている。何物にも束縛されない自由な時間があったこそ、人は自らの関心事を追求し、知恵を獲得し、個性を伸ばすことができる。ところが日本の勤労者の余暇生活はまことに貧弱で、先進国の中で最も低い水準にある。一日の労働時間が長く、残業はほとんど野放し、過労死する人が後を絶たない。世界の常識である土曜・日曜の2日休みは、日本では勤労者の6割にしか行きわたっていない。これも当然視されている長期休暇（バカンス）も、欧米では4〜6週間に

及ぶというのに、日本では有給休暇の付与日数は平均15日、しかも連続して取ることは難しく、結局、休暇の半分は取り切れずに返上されている。かような余暇貧乏国では、社会教育が発展しようがないというのが現実である。乏しい休日、地域の課題を意識して社会教育活動に邁進しようというのは、並の勤労者には敷居の高い課題になってしまう。これらの活動はもっぱら家庭にいる女性たちやリタイア組の高年者に委ねられることになる。社会教育関係者は、日本の労働運動の旗手である連合に働きかけて、労働時間短縮を大目標に据え直すことを訴えなければならぬ。労働運動というのは単に「賃金を上げろ」という運動ではなく、過酷な長時間労働の是正を求めて資本家に立ち向かったのが大本である。それは「労働をしましよ」という運動ではなく、「（不当な）労働はしません」という余暇獲得運動であったことを思い起こすべきである。

一定の余暇が獲得できたとして、それはどのように活用されるのか。それについての古典的な理論としては、フランスのデュマズディエによる①休息、②気晴らし、③自己開発の3段階で余暇の機能

を説明するものがある。このうちの自己開発が社会教育Ⅱ生涯学習につながることは言うまでもない。最近はより精緻に余暇（レジャー）の様相を捉える「シリラス・レジャー」論が注目を集めている。カナダの余暇学者ロバート・ステピンスが提唱したもので、日常生活の中の気楽で気ままな余暇Ⅱカジュアル・レジャーに対して、真剣で真面目、専門的な知識やスキルを活かして継続的に追及される余暇活動を「シリラス・レジャー」と名付け、それが人生において大きな価値を持っているとされる。そしてシリラス・レジャーの主要な内容は①趣味（ホビ）、②アマチュア、③ボランティアだという。この考え方は示唆に富んでおり、われわれが余暇を基盤に新たな社会教育のあり方を構想するうえで重要なヒントを与えてくれる。

筆者なりの日本的解釈だが、まず「趣味」という独自の世界を持つことは「個人」や「個性」を作りあげる上で欠かせない。趣味という語はもともと審美性Ⅱ美なるものへの感受性を意味していて、「趣味がいい」とか「趣味に合わない」のように言い慣わしてきたのだが、それが次第に具体的な活動を意味するように

なつて行つた。いずれにしても「その人らしさ」を感じ取るには趣味を知ることによつて、たまには履歴書には必ず「趣味」欄が設けられている。

アマチュアは「愛好者」のことだが、ステピンス的にはただの物好きではなく、プロ並みの見識や実力を持ちながらそれを仕事にはせず、報酬では動かない、言わばあらゆる権威から自由に生きることとを意味している。かつてのオリンピックには「アマチュア規定」があつて、出場できるのは純粋にスポーツを楽しむ人に限られ、プロは排除されていた。むしろそこには貴族の楽しみから始まつたスポーツの階級性の名残があるとは言え、金まみれのビジネスからスポーツを遠ざける意味があつたのである。研究の分野でも、大学のように制度化された研究組織とは無縁の「民間学」がさまざまな分野で存在して、柳田国男の日本民俗学のように独自の実績を築き上げているものもある。アマチュア学問こそ、純粋で自由な知の探究の象徴ともいえるだろう。

そしてボランティアである。volunteerの語根にあるvolはラテン語の「望む」という語であり、ボランティアは志願者、

有志というのが原義である。王様の雇ひ兵の軍隊に対峙して自由都市を自ら守つた義勇兵がボランティアの起源である。日本でボランティアが大きく注目されるようになったのは1995年の阪神淡路大震災以来であり、その後、東日本大震災や近くはこの新年の能登のような災害があるたびにボランティアが活躍している。しかし、緊急事態への支援が前に出過ぎたため、日本のボランティア理解は救援活動に偏りすぎているのではないかと危惧される。シリアス・レジャーの文脈から言えば、地域のあたりまえな毎日の生活において、人々の交流を図り、相互扶助の実を上げていくことがボランティアの王道であると思う。それも行政の補完に終わるボランティアではなく、地域の問題を発見し、改革すべきことを提案し、新たなまちづくりのスターターになることがボランティアの存在理由でなくてはならない。

「シリアス・レジャー」という視点を導入することで余暇を基盤とする新たな社会教育の方向が見えてくる。「趣味」を発見して打ちこむことによつて「誰でもない、他ならぬこの私の世界」を確立したうえで、「アマチュア」精神—それ

は言うまでもなく遊びの精神につながるものでもある—を発揮して自分を磨き、自らの可能性を伸ばし、「ボランティア」として地域の関係づくりに飛び込んで、社会のあり方そのものを改善、開発していく。その過程の総体が21世紀の闇を打ち払い、時代を前に動かす社会教育のあり方であると考ええる。

#### 〈参考文献〉

- 田辺信一『現代地域社会教育論』上下 ドメス出版 1972年  
 松下圭一『社会教育の終焉』筑摩書房 1986年  
 ジーン・レイヴ／エティエンヌ・ウエンガー 佐伯胖訳 『状況に埋め込まれた学習』産業図書 1993年  
 島田修一編『生涯学習の新たな地平』国土社 1996年  
 末本誠・松田武雄編著『生涯学習と地域社会教育』春風社 2004年  
 天野正子『つきあい』の戦後史』吉川弘文館 2005年  
 佐藤一子『現代社会教育学』登用館出版社 2006年  
 松田武雄編著『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版 2012年  
 蘭田碩哉『余暇という希望』叢文社 2012年  
 蘭田碩哉『余暇の平成史序説』あかめでいい』27号 (有) ライフビジョン 2020年